

研究ノート

『Surface』シリーズ no. 3  
作品が空間にもたらす場の特性

池田 晶一

日本福祉大学 情報社会科学部

“Surface” series no. 3  
The personality of the place that works give the space

Shoichi Ikeda

Faculty of Social and Information Sciences, Nihon Fukushi University

**Keywords** : セラミック, 色彩, 空間, Art

1. はじめに

今回はセラミックによる作品制作, 「Surface」シリーズ no. 1・2 に引き続き, 2006 年以降に発表した作品の制作, 展示の方針について述べてゆく。そして空間と作品の関係から生じる作品の位置付けについて, 制作や発表の流れにそって述べて行きたい。

2006 年 10 月, Galeria Punto (岡山市), ギャラリー AO (神戸市) の 2 カ所で連続して個展を開催した。この展覧会は当初, Galeria Punto のみの予定であったが, 計画中にギャラリー AO から話を頂き, 引き続き開催する運びとなった。

また 2007 年 3 月には金沢美術工芸大学大学院陶磁コース 10 人展をギャラリーマロニエ (京都市) で行い, 同作品を違ったアプローチで展示した。今回, この 3 つの会場において, 一部同じ作品で異なった展示方法をとった。その展示方法による作品の質の違いをそれぞれの展覧会から見てゆきたい。

加えて, 同 2007 年 3 月に「てらまち こころまち まちや展」(金沢美術工芸大学大学院博士後期課程のグ

ループ展) において, 空間との関わりをテーマにした別の作品を制作した。それについても触れてゆく。

2. 壁面への展開 (Galeria Punto にて)

Galeria Punto では, 1 年おきに個展を開催しているが, 今回の個展は同ギャラリーが岡山市表町の新しい場所に移転してからの初めての個展であった。

以前の会場と比べ一回り大きく, 離れた窓からは自然光も入り, 昼と夜では雰囲気に変化のある会場となったため, 事前に会場の様子を確認し, 壁の大きさや空間の有り様を踏まえた上で, 作品の制作に挑んだ。

展覧会のタイトルは, 「心の眼に映る色 - セラミックによる色彩の妙 - 展」とした。

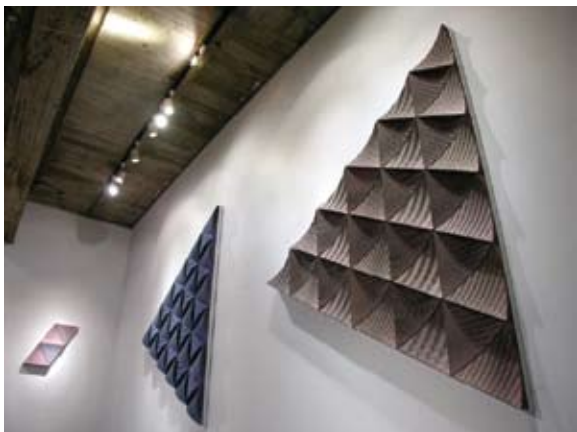
展示計画は, 壁面に一辺 2m の正三角形のパネル作品 < 2 点一組 > と, 一辺 1.5m の正三角形のパネル作品 < 2 点一組 > をメインに, 他小品を配置することとした。

大きな壁面のパネル作品 [写真 1・2] に展開した理由は, 作品の表面上に現れる様々な色彩効果 (研究論文「Surface」シリーズ no. 1・2 を参照.) を感受する



[写真1] 手前から「風の空気」・「太陽の空気」

ために鑑賞者と向き合う形で面を構成したかったためである。また正面や右側から、左側から、見る位置によって変化する色彩を見せるために意図したものでもある。



[写真2] 手前から「深い淡青の三角形」・「深い淡紅の三角形」

少し、作品表面上の色彩効果について解説を加えておく。

作品の基になる形状は正三角形で、その表面は、緩やかに弧を描いている。その上には細かなレリーフ状の波模様があり、それぞれの作品は、ブルーとピンク・イエローとピンク・ブラックとブルー・ブラックとピンクのそれぞれ2色の色化粧土が、異なった角度から表面に施されている。細かなレリーフ状の波模様の表面には、その細かな溝の側面の片側に一色の色、もう片側には別の色が入り込み、それを見る角度によって見える色味の面積が変化する。

また、三角形の配置される角度と、光の当たり方によっても様々に色が変わる。

人が立つ位置で表面に見える色が異なる。移動すること、場所が変化することにより、作品の表面の色が変化

したように見えるのだ。

以上が、色が変わって見える仕掛けである。



[写真3] 作品表面の拡大図

この仕掛けは、大きな面の作品を制作することで、実際の効果を会場で確認することができた。鑑賞者も色の変化に気付くと、どうして色が変わるのか覗き込むように作品の表面を見ていた。小さな子供たちは、純粋に色の変化を楽しみ、近づいたり離れたったり、右側から左側からと忙しく動きながら作品を見ていた。

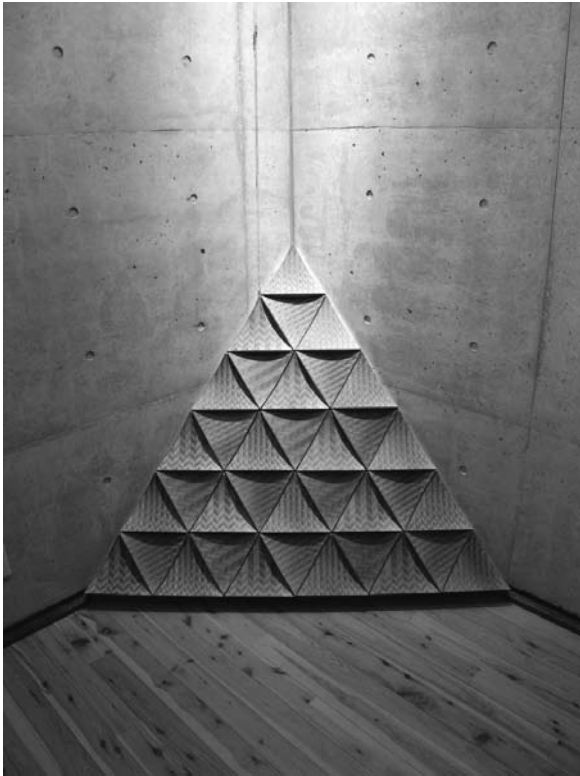
また以前の作品からも鑑賞者からあった感想で、人によって作品が固く見えたり柔らかく見えたり、質感の感じ方も変化したりしているようであることが、今回の展覧会の中でも確認できた。多くの鑑賞者は、事前にセラミック製（焼物）であると知らない場合、布の様に感じている場合が多い。

### 3. 部屋のコーナー・床面への展開（ギャラリーAOにて）

さて、先の Galeria Punto から会場を移し、ギャラリーAOでの展示である。展覧会のタイトルは先の個展と同様に、「心の眼に映る色-セラミックによる色彩の妙-展」とした。

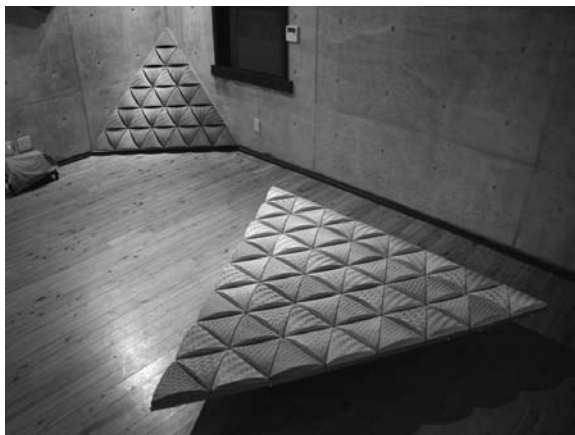
この会場では、[写真4～6]の様に、部屋のコーナーと床面を中心とした展示を行った。この展示は本来私の作品に対する計画ではなく、会場の条件に合わせた物であった。と、いうのは、会場の壁面はコンクリート打ち放しの壁で、釘やねじを壁に打つことが出来なく、壁の上部にある展示用のワイヤーレールも作品の重量に耐えられないということであった。Galeria Punto の様に作品を壁面に固定、もしくは吊り下げる事が不可能であったのだ。事前に幾らかの対応策を考えていたが、ほぼ現場合わせで展示作業を行った。

さて、この様に展示方法を変更した結果、同じ作品が別の作品の様に存在することを私自身が身を以て体験した。

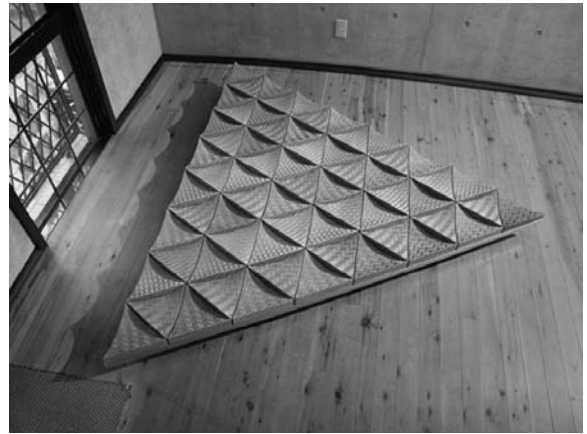


【写真4】「深い淡紅の三角形 Corner」

実は、作品の空間における位置付けは、私の作品制作の上で考える一つの課題でもあった。「Surface」シリーズの作品群は、おおよそパネルを中心とした壁面作品だった。その理由は、壁からの距離や位置によって様々な色彩や光による陰影を作品の表面に映し出し、それを鑑賞者に提示することを目的としていたため、壁面への展開がベストであるという考えからである。また、立体的な変化よりも面の中にある多様性を導きだそうとした



【写真5】手前から「太陽の空気」・「深い淡青の三角形 Corner」



【写真6】「風の空気」

一つの結果でもある。

その一方で、壁に張り付いた状態から空間的に大きく展開することは、今後の私の作品の方向性にとって大きなテーマともなりつつあったのだ。

ある意味、ギャラリー AO での展示環境は、その制約故に壁という私のそれまでの考えを取り払うことに貢献したともいえる。

実際の作品を見てゆくと、コーナーに位置する作品は、コーナーにあるということ以上に、コーナーに存在する量としての意味を有している。

また、床置の作品においては、360度あらゆる角度から作品の面を見るということが可能になっている。これにより正面からの距離に対してその意味を失っているが、床に置くことで、鑑賞者は作品の前にしゃがみ込んで花畑の花を見る様に作品を見ていた。また光の方向について、前光、逆光など、様々な角度からその表面の色と光を感受することが出来ていた。

これは壁面に設置していた作品ではなかった事で、私の中で、新たな発見と新たな方向性への道筋を示してくれる事になった。

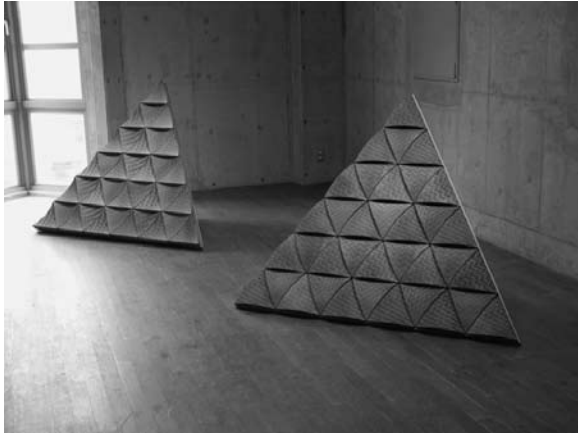
#### 4. 立体(空間)への展開(ギャラリーマロニエにて)

次に2007年3月、「金沢美術工芸大学大学院陶磁コース10人展」からの作品を見てゆく。

この作品は、先のコーナーに設置した作品「深い淡青の三角形 Corner」・「深い淡紅の三角形 Corner」と同じ物であるが、空間の真ん中に位置する様に [写真8] 裏に自立するための台を新たに加えた物である。

Galeria Punto, ギャラリー AO と作品を変化させ、もう一段空間の中央へ作品を引きずり出してみた。

ここでは又、新たな作品の有り様を示している。まず、正面から見ると空間の中に独立し存在する平面的な形として認識される。次第に側面、裏へと見てゆくとピラミッドを1/4にした様な全体の形(立体)が認識できる。



【写真7】 手前から「Pyramid 1/4 (black-blue)」・「Pyramid 1/4 (black-pink)」



【写真8】 写真7の側面

ここでは正面から見たときの平面性と、裏面が見えたときの量としての有り様が同時に存在していることが私自身にとって興味深かった。

また、鑑賞者は作品のそばに寄り、非常に近い位置で斜めから観察したり正面に回ったり、先の2会場での展示とは異なった見方をしていた。

ここでも又、新たな発見を私自身がする事になったのである。

## 5. 空間を含んだ作品の展開「てらまち ころまち まちや展」(金沢町家にて)

2007年3月金沢市内の町家において上記グループ展を開催した。この展覧会には様々な素材を専門にしたそれぞれのアーティストが作品を持ち寄ったが、町家とい

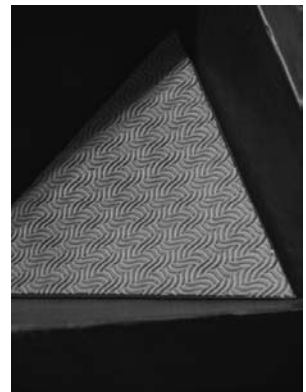
う場の特徴をテーマにそれぞれが作品制作を行った物である。

私は、先程までの自身の作品の流れから、空間そのものを作品にしてゆくということを考えた。数ヶ月前から現地の見学をし、どの場所にどのように作品を設置してゆくの計画を立て進めて行った。ここで私は、[写真9]にある様に、階段という縦の繋がりのある場所を選んだ。階段は、生活する場そのものではないが、規則的な段差と一階から二階を繋ぐ変化のある空間で出来ている。

また、階段というと、日頃掃除をしている時に隅っこ埃などが私には気になる場所だった。ギャラリーAOでコーナーに作品を据えたことから派生し、階段の各隅っこに正三角形の作品を配置しようと考えた。



【写真9】 階段の隅っこ



【写真10】 写真9の部分



【写真11】 階段の隅っこ (階段の上部から)

[写真9~11]がその様子であるが、階段の全体像と格段ごとに配置した個々の作品の見え方でこれまでに無い展開が出来たと思っている。階段を上ろうとした時や降りようとした時には、リズムカルに並ぶ作品の流れが見えてくる。また、一段一段階段に足をおろす際には、個々の作品の細かな表情までも見て取れるようになる。

個としての作品から、場としての作品への変化を改めて私自身感じていた。

## 6. まとめ

Galeria Punto, ギャラリー AO, ギャラリーマロニエ, 金沢町家と4つの展覧会の中で、平面から立体、造形物と空間、そして場の特性へと作品の有り様を探ってきた。これは全てが最初から全てが計画されてきた訳でもなかったし、意図しなかったことも抱えながら進めてきたことでもあった。しかし、私の目指すべき方向性は、ある時を境に一つの方向性を持って流れてきた様に思う。

今ここのまでの展開の中で私自身が考えていることは、作品は作品のみでは完結しないということである。場所があって、スペースがあり、そこにどのように作品を関連付けるかである。

作品は多くの場合、そのものだけで完結している様にとらえられるし、又その物のみをいろいろな場面で評価もされる。しかし、作品はいつも必ずどこかの場所に据えられるのである。本来据えられるべき場を意識すること自体は当たり前のようなものであるが、その場は最初から限定的な物でない場合が多いので、その場その場での判断を余儀なくされている。

しかし、今回私が制作した「階段の隅っこ」は、階段その物を作品として考えた様に、「階段+作品」で「=新しい意味付け(特性)」をそこに与えた様に思う。今回は紹介していないが、私のかつての作品の中にもそのようなニュアンスの作品はいくつかあった。それらの作品は私にとって一つの場として認識している様に思う。

「個としての作品から、場としての作品への転換」「場の特性」。今回それぞれの形で、作品をまとめてきたが、今後の制作の中でより深く見つめるべきテーマが現れた様に感じている。それらを実際にどのように具現化してゆくかが私自身の次の取り組みである。可能性を広げながら精力的に取り組んでゆきたい。

今後について少し触れておくと、現在「場」というものが私の重要な視点になってきた。これを考える時、作品に対する展開のイメージはある一つの限られた形ではなく、またスケールも実際実物の作品を作るには非常に大きなものが考えられる。場合によっては物理的に形あるものを制作するには無理なものも生じる可能性がある。

そこで、私の創造するイメージを視覚化し提示していく為に、C.G.や映像等の媒体による表現も視野に入れ、

様々な可能性を探ってゆきたい。

具体的な像はまだおぼろげなイメージで語るに至らないが、今後の展覧会や論文等の中で発表してゆきたい。

## 7. 謝辞

さて、今回、Galeria Punto・ギャラリー AO においては、ギャラリー企画として個展を開催いただいた。発表の場は作品を制作する者にとっては、常に大事な位置付けでそれにかわるものは無い。御支援頂ける事は本当に有難い事である。展覧会の準備から会期中、ギャラリーオーナーはもとより関係者に大変お世話になった事、厚く御礼申し上げる。

また、ギャラリーマロニエ、金沢町家のグループ展においても関係者にお礼申し上げるとともに、同出品者にも感謝を申し上げたい。

又、作品を見ていただき、ご助言いただいた方々にも、感謝致すところである。

皆様に、今後の制作・発表を見守って頂けることを切にお願い申し上げたい。

## 8. 作品データ (全作品)

\* 半磁器製、色化粧土塗布

\* 1160°C酸化焼成

### ・個展 (Galeria Punto・岡山市)

太陽の空気 <△1辺2,000mm>

風の空気 <△1辺2,000mm>

深い淡紅の三角形 <△1辺1,500mm> \*a

深い淡青の三角形 <△1辺1,500mm> \*b

光の断片 <w:225 × d:70 × h:650mm>

風の断片 <w:225 × d:70 × h:650mm>

空気の断片 <w:225 × d:70 × h:650mm>

深い淡紅の三角形 (小) <w:450 × d:70 × h:260mm>

深い淡青の三角形 (小) <w:450 × d:70 × h:260mm>

深い淡黄の三角形 (小) <w:450 × d:70 × h:260mm>

### ・個展 (ギャラリー AO・神戸市)

太陽の空気 <△1辺2,000mm>

風の空気 <△1辺2,000mm>

深い淡紅の三角形 Corner <△1辺1,500mm> \*a

深い淡青の三角形 Corner <△1辺1,500mm> \*b

光の断片 <w:225 × d:70 × h:650mm>

風の断片 <w:225 × d:70 × h:650mm>

空気の断片 <w:225 × d:70 × h:650mm>

深い淡紅の三角形 (小) <w:450 × d:70 × h:260mm>

深い淡青の三角形 (小) <w:450 × d:70 × h:260mm>

深い淡黄の三角形 (小) <w:450 × d:70 × h:260mm>

- ・「金沢美術工芸大学大学院陶磁コース 10 人展」  
(ギャラリーマロニエ・京都市)

Pyramid 1 / 4 (black-blue) <△ 1 辺 1,500mm> \*a

Pyramid 1 / 4 (black-pink) <△ 1 辺 1,500mm> \*b

- ・「てらまち ころまち まちや展」(金沢町家・金沢市)

階段の隅っこ 11 個一組 <△ 1 辺 300mm>

Pyramid × 2 6 個 <w:190 × d:160 × h:140mm>

\*a,b は、それぞれ同じ作品の展示方法を変えたもの。

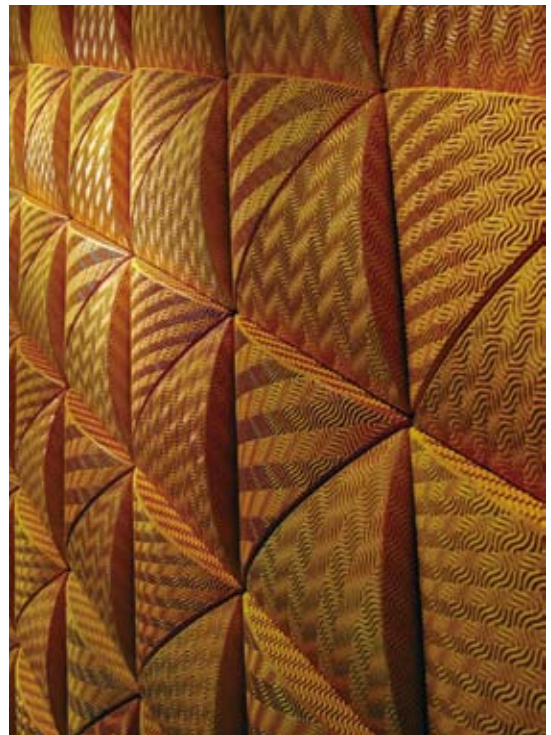
個展 Galeria Punto 2006年10月



「風の空気」・「太陽の空気」



「風の空気」部分



「太陽の空気」部分



「深い淡青の三角形」・「深い淡紅の三角形」



「深い淡青の三角形」部分



「深い淡青の三角形」部分







「深い淡黄の三角形（小）」・「深い淡紅の三角形（小）」・「深い淡青の三角形（小）」



「空気の断片」・「光の断片」・「風の断片」

個展 ギャラリーAO 2006年10月



会場風景



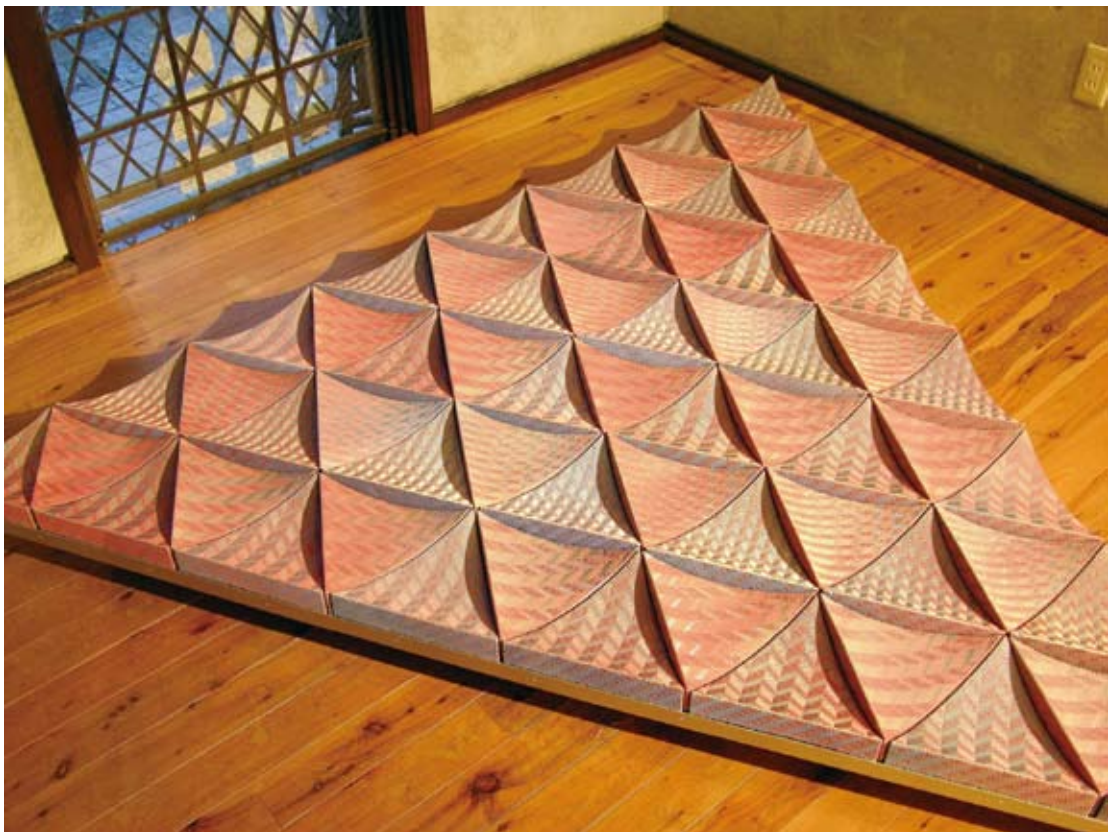
「深い淡紅の三角形 Corner」



「深い淡青の三角形 Corner」



「太陽の空気」



「風の空気」



「Pyramid 1 / 4 (black-pink)」・「Pyramid 1 / 4 (black-blue)」

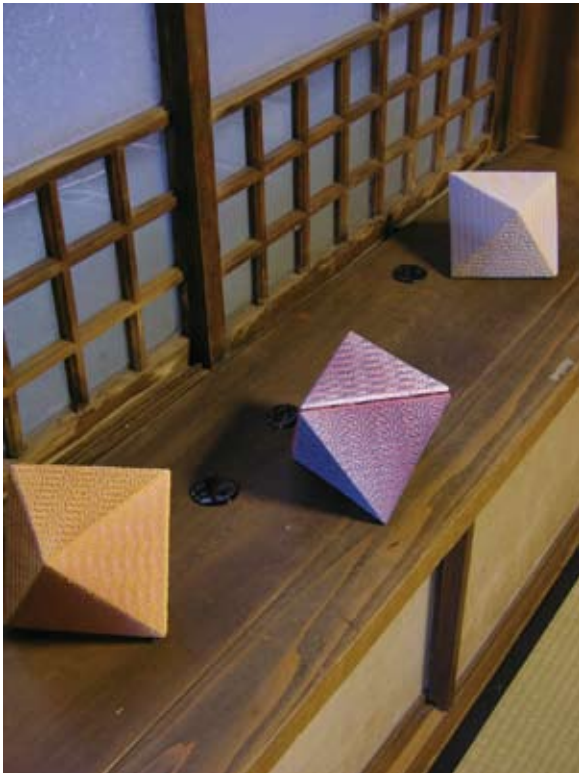


「てらまち こころまち まちや展」(金沢美術工芸大学大学院博士後期課程のグループ展) 2007年3月



「階段の隅っこ」 11個一組





「Pyramid x 2」 6個

